

日本性科学会 ニュース

第36巻第2号

平成29年(2017年) 6月

発行人: 大川 玲子 印刷所: 株式会社 印刷

第37回日本性科学会学術集会

日 程: 2017年10月15日(日) 9:00~17:30

会 場: 大阪府立大学 I-site なんば

(南海電鉄なんば駅から徒歩12分、地下鉄御堂筋線・よつ橋線「大国町駅」から徒歩7分)

学 会 長: 大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 教授 山中京子

【プログラム】

シンポジウム

・シンポジウムⅠ セクシュアリティと看護

座長: 渡邊香織 (大阪府立大学)

シンポジスト: 佐保美奈子 (大阪府立大学)、古山美穂 (大阪府立大学) 他

・シンポジウムⅡ 性の加害にまつわる神話

座長: 東 優子 (大阪府立大学)

シンポジスト: 上村茂仁 (ウィメンズクリニックかみむら院長)

いくの学園相談員、岡田実穂 (RC-Net 代表)

・シンポジウムⅢ いろいろな性と愛のカたち

座長: 早乙女智子 (京都大学)

シンポジスト: 熊篠慶彦 (ノアール理事長)、大北全俊 (東北大学)

指定討論者: シャーロット・ローフグレンーモーテンセン (スウェーデン マルメ大学)

・シンポジウムⅣ 性の科学と教育の未来

座長: 高村寿子 (自治医科大学)

シンポジスト: 関口 久志 (京都教育大学)、染矢明日香 (ピルコン理事)、

土肥いつき (高校教員・セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク)、

小貫 大輔 (東海大学)

特別講演: 「知的障害と性教育」(同時通訳あり)

座長: 山中京子 (大阪府立大学)

演者: シャーロット・ローフグレンーモーテンセン (スウェーデン マルメ大学)

会長講演: 「性科学の学際性の再検討(仮)」

座長: 大川玲子 (日本性科学会理事長)

演者: 山中京子

ランチョンセミナー: 「メディアと性情報」

演者: 宋 美玄 (産婦人科医)

一般演題

大会事務局 大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 東 優子

FAX: 072-254-9798 E-mail: JSSS37@ml.osakafu-u.ac.jp

ホームページ: <http://jsss37.kenkyuukai.jp/>

なお、下記プログラムも同時に開催されます。

第17回 日本性科学連合 性科学セミナー 10月14日(土)

GID(性同一性障害)学会 エキスパートセミナー(日程調整中)

Vol. 36

No.
2

日本性科学会

〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

TEL・FAX 03-3868-3853

第23回 世界性の健康学会 WAS（プラハ） 参加報告

京都大学大学院医学研究科

早乙女 智 子

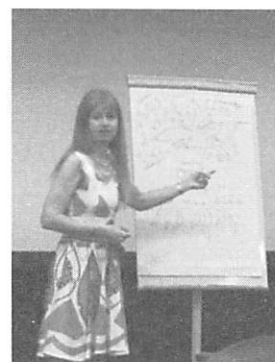
今回は行き先がチェコということで、一応、クラシック音楽好きの夫と一緒にいくかどうか聞いてみた。そうそう休みは取れない。もちろん、答えはノーである。ということで、プラハの春音楽祭、もとい、「世界性の健康学会」および「チェコ性科学視察ツアー」に、夫の同伴なしで出かけた。いつものように。一般的に学会への妻同伴はよくあるが、夫の同伴は少ない。これもジェンダーバランスの点ではおかしいことである。

海外はどこもそうだが、チェコもなかなか行けるところではない。しかし、世界文化遺産のチェスキークルムロフという、茅島江子先生イチオシの美しい中世都市の訪問は諦めて、視察として Narodni 家族計画協会と、Zakladni 小学校見学をさせて頂いた。社会主義国だったこともあり、中絶に関しては否定的な態度がみられたが、日本では幼稚園にあたる5歳から教育が始まり、6～15歳の小学校、中学校にあたる教育の中で、性教育が行われており、日本よりはシステムティックであるように見受けられた。小学校では、生物学の学習の延長として you tube に上がっているような視覚教材を用いた教育が行われていた。

今回の日本からの学会参加者は、地元チェコを上回る30名、USA, UK などに次ぐ国別では第5位の多さである。大学院の菅沼ゼミからも二人参加し、心強い限りである。発表者は口演7名、ポスター7名。学会の公用語は英語だが、スペイン語/ポルトガル語のセッションや、発表者が中国人だけの中国セッション、そして現地のチェコ語セッションなどもあった。参加者は650名とますますの盛会であった。

WASの総会では4年に一度の理事改選選挙があり、東先生と共に、不肖私も立候補させて頂いた。結果は東先生が理事として残り、私は思いのほか支持を頂いたものの落選。個人的には学会参加することに意義がある時代を終えて、これからは優秀演題やゴールドメダルレクチャーに値する研究や発表に繋げて行くことを目指そうと思った。2日目の夜は、日本からの参加者24名が参加して、チェコビールの夕べとして飲み明かした。後半はライトアップされたプラハ城を眺めながら親睦を深める夜となった。

性科学の守備範囲は案外広い。脳生理学から行動学、比較文化学、マインドフルネスやヨガの活用、ポルノ、性教育、セックスカウンセリングなど、日本ではおおびらに語られないことも、理念や定義から最新科学まで、ここでは躊躇なく語られる。私が今回最も惹かれたのは、スイスの Karoline Bischof 先生の Sexocorporel Counseling というアプローチで、筋緊張と感情の関係を理解することで、性生活の改善を促すことができるというもの。筋緊張と感情、そして性的な感覚を知覚させながら本来持つ力を高めるもので、ヨガにも似ている。骨盤血流を増すような骨盤の動きをマスターしたり、室内をみんなでぐるぐる歩くだけで、普段、人との距離や人の動作をみて自分が無意識に取っている行動を認識したりできた。いつか日本にお招きしたいと思った。



10年前のオスロの WPATH(World Professional Association for Transgender Health) とイエテボリの WASの学会のハシゴをして以来、国際大会の WAS(World Association for Sexual Health) とアジアオセアニアの AOFs(Asia Oceania Federation for Sexology) が交互にあるので、毎年出席してきた。ポルトガルのポルトで開催された EFS(European Association for Sexology) に日本から一人で演題を出して出席した時に、アメリカ人の発表者の時に、「早口で何言っているのかわからないよ」というようなことをイタリア人が言ったので、周りにつられて笑ってしまった。英語が苦手だと思っていた当時、片言でも話せば誰もがゆっくりと耳を傾け、時には英語を直してくれる。性科学に携わる人たちは、概しておおらかで楽しい人ばかり。国や地域によって、性の課題は様々だが、それに立ち向かう力強さも持ち合わせている。海外から学ぶこと、そして日本から発信すること、どちらにしてもまずは参加することに意義がある。来年2018年の AOFs は8月17～19日ごろの真夏のインド、チェンマイ、2019年の WAS はメキシコの予定。体力に自信のある方、英語が不安なんて物怖じしないで、是非ご一緒しましょう。



WAS: www.was2017.org

立教女学院短期大学現代コミュニケーション学科 佐々木 掌 子

京都の学術出版社である晃洋書房から『トランスジェンダーの心理学——多様な性同一性の発達メカニズムと形成』(税別2,500円)を上梓しました。本書は、3,300組以上の双生児と545名のトランスジェンダー当事者への調査を通じて、多様で流動的な性別のあり方がどのような発達メカニズムで起こり、どのように形成されていくのかについて心理学の立場から扱った研究書です。調査協力してくださった545名のトランスジェンダー当事者は、性別違和を主訴に医療機関に来院した方々でした。短期間にこれだけの協力を得ることができたのは何故か？それは、日本性科学会の会員の先生方の御協力があったからです。日本性科学会の先生方、そして学会への感謝を込めて自薦文を書かせていただきます。



日本性科学会は、ご承知の通り性同一性障害医療を先導してきた専門家が多く在籍する学会です。それゆえ私は修士課程のときに入会をしたのですが、すぐに針間克己先生(はりまメンタルクリニック院長)の下で精神神経科臨床を学ばせていただく幸運に恵まれました。本書では、「ジェンダー・アイデンティティ尺度」という心理尺度を軸に議論を展開しています。この尺度は自分の性別のアイデンティティ(統一性、一貫性、持続性)を測定するために、修士課程のときに臨床に関わる中で仮説を立て、針間先生から適宜ご助言をいただき完成させたものです。修士課程を終えたあと臨床心理士取得前の1年間の見習い期間には、塚田攻先生(彩の国みなみのクリニック院長)が当時勤務されていた総合病院の精神神経科で研修をさせていただきました。ここでも性同一性障害に留まらない精神神経科臨床のご指導を受け、臨床思考の枠組みを鍛えていただきました。博士課程に進むとさらに多くの当事者にご協力を仰ぎたいと思い、中塚幹也先生(岡山大学教授)や堀口貞夫先生(主婦会館クリニック院長)にも調査のご協力をいただきました。堀口貞夫先生に至っては、修士課程を終えたばかりの私を主婦会館クリニックで雇用してくださいました。当初は堀口貞夫先生、堀口雅子先生の陪席をさせていただきながら、産婦人科臨床のご指導を頂き、現在もなお週に一回カウンセリングの仕事でお世話になっています。

そして最初に針間先生の下で臨床に関わり始めた2002年から7年後にあたる2009年にこれまでの論文や報告書、学会発表を元に学位請求論文を書き、慶應義塾大学大学院社会学研究科に提出をしました。そのときの副査となってくださったのが阿部輝夫先生(あべメンタルクリニック院長)です。そして本書は、受理された博士論文を元に、最新の学術報告のアップデートなど若干の改変を加え、書き上げられました。これでいかに本書が日本性科学会なくては書き上げられなかったのかがご理解いただけたと思います。

さて、本書の“読みどころ”についてご紹介します。去る5月24日(水)に日本性科学会症例研究会で本書についてディスカッションする機会をいただきました。そこでお話したオススメできる点の一つが「数値を読み解く面白さ」です。たとえば、「性同一性障害をもつ人は、より男らしさ／女らしさの規範に同調しやすいという。……(中略)……それは、自分が女性であるというアイデンティティに不安が残るゆえに、らしさ規範に過剰に従う結果、そのような行動をとってしまうのである(p55～56: 山田昌弘「モテる構造」ちくま新書)」という言説があります。しかし本書はそれを支持する結果にはなっていません。本書に示す統計データをみると、性役割ステレオタイプへの同調とジェンダー・アイデンティティとは関連はなく、ジェンダー・アイデンティティ

と関連のより強い性役割と関連のない性役割とがありそうであることに気がつきます。その他にも、ホルモン療法がジェンダー・アイデンティティ得点を上げる一方、性別適合手術がジェンダー・アイデンティティ得点を上げなかったという結果も得られています。これは、すでに十分にジェンダー・アイデンティティの高い当事者が戸籍の性別変更のために手術を行っている可能性を示唆しているかもしれません。このように臨床的に深く考察したくなるデータが満載です。また、性別違和の原因にご関心のある方にも、遺伝と環境の相対的な影響力を炙りだすことのできる双生児法による行動遺伝学分析の統計データを提示しているので、小児期、青年期、成人期によって遺伝率が変化していくという結果は、きっと知的好奇心を刺激するものになると思います。

「性はグラデーション」と言われて久しいですが、本書全体を通じて明らかにしたのは、ジェンダー・アイデンティティが動的で、量的で、多次元的に捉えうるという視点です(表1)。それを統計的に表現した書籍だとも言えます。そしてそのような視点こそが実際の臨床で一人ひとり異なるセクシュアリティを理解するのに欠かせない捉え方なのではないかと思っています。本書で心理学的な意味での性別の多様性に触れていただければ幸いです。

表1 本書における従来の研究視点との違い

	従来 (分類的)	本研究 (分類的) (多次元的)
性同一性の捉え方	男性, 女性	男性, 女性, Xジェンダー 統一性, 一貫性, 持続性の強弱
異なる性別で生きる人の捉え方	性同一性障害・性別違和 (精神疾患)	トランスジェンダー 背後に正規分布を仮定 (集団内の個人差)
性同一性の発現要因	遺伝, 環境単独の影響を示す	遺伝環境要因双方の発達の变化

資格認定委員会より

日本性科学会副理事長（認定制度担当） 阿 部 輝 夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定、並びに更新規定（日本性科学会雑誌vol. 1 に掲載）に基づき、2017年度の新規資格認定並びに更新資格認定を行います。

尚、資格認定申請期間は、新規・更新ともに8月1日～8月31日です。新規資格認定希望者は、申請書類を日本性科学会事務局までご請求下さい。資格更新該当者には、事務局より7月中に更新申請書類を郵送いたします。

いずれの場合も資格認定規定を御熟読の上、ご申請下さい。御不明な点は学会事務局にお問い合わせ下さい。
(TEL 03-3868-3853 受付時間 月・水・金 10：00～13：00)